

Wesley Hall News



女子短期大学始業礼拝
(2007年4月)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No.96
2008.4.1.

特集 入学

説教「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」…………… 嶋田 順好… 2

●メッセージ

幼稚園	……………	川島 祥子／生沼 晴美…	4
初等部	……………	戸井田直人／たちしんのすけ…	5
中等部	……………	関 隆一／蛸原慎之介…	6
高等部	……………	宇田川雅子／浅賀 未央…	7
女子短期大学	……………	鈴木 俊之／篠崎みなみ…	8
大学	……………	矢部 義之／安藤 果菜…	9

●「地の塩、世の光」ズボン、痛い泣いている …………… 福井 達雨… 10

●キリスト教図書紹介 ルルド傷病者巡礼の世界 …………… 支倉 壽子… 11

●青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その23… 氣賀 健生… 12

●私の教会 日本基督教団相模原教会 …………… 齋藤 久恵… 14

●コラム 教会暦 …………… 15

●宗教センターだより …………… 15

説教

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」

ローマの信徒への手紙12章15節



嶋田 順好

学院宗教部長

ご入学おめでとうございます。期待に胸を膨らませて青山学院の門をくぐられたことと思います。神の祝福のもと新入生のお一人お一人が、喜び溢れる学びと出会いを与えられ、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」心を持った人として、健やかに成長していかれることを心から願うものです。

皆さんは、今から千年前、二千年前の人々と自分達を比べて、どちらが人間として有能だろうかと考えたことがあるでしょうか。大抵の人は、このような問いを出されたら、「現代の我々がの方が有能に決まっているではないか」と素朴に答えるに違いありません。たしかに自然科学的な知識や能力という点では、昔の人々よりも、断然、私たちがの方が豊富な知識や能力を身につけていると言えるでしょう。しかし、人間の能力は多様です。例えば、記憶力となると、どうでしょう。なんでも気楽にコピーができ、手軽に録音ができる今日、私たちの記憶する力はどんどん退化していつているのではないのでしょうか。

銀座にある日本聖書協会のなかに、聖書図書館という小さな図書館があります。そこを訪ねた時に聖書の歴史を辿るスライドを見ることができました。そのなかで、とても印象に残ったのは、小さな路傍の石に、聖書の言葉が記されている写真を見出したことです。

思うにグーテンベルクが15世紀に活版印刷術を発明するまでは、庶民が大量に安価な書物を手に入れることは全く不可能なことでした。ということは、二千年のキリスト教会の歴史のなかでも、誰もがたやすく聖書を持つようになったのは、宗教改革以後の五百年、いや、実際は、この二百年か三百年の期間にすぎないのです。だからこそヨーロッパの中世の時代には、民衆

に聖書の内容を分かりやすく教える手段として、キリスト教美術が盛んになったと言えるでしょう。

ところで、先程の小石の話に戻りますが、なぜ、小石に聖句が記されていたのでしょうか。もちろん、礼拝に参加した民衆が、その日、教会で朗読された聖書の言葉を必死に脳裏にたたき込んで、礼拝からの帰り道、道ばたの石ころを拾い、忘れないうちに書き込んだものにちがいありません。その石ころが、一つ、二つ、三つと増えていって、その人自身の聖書が作られていったのです。

この説教で取り上げた聖句は「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」というよく知られた短い御言葉です。これなら誰もがすぐに覚えられます。しかし、「ローマの信徒への手紙」の全体をそらんじることができるか、と問われて、それができる人が、どれだけいるのでしょうか。少なくともそのような記憶する力は、断然、昔の人々の方が優れていたと言えるのです。

実は、記憶力だけではありません。想像力、イマジネーション能力も、昔の人の方が優れていたように思われるのです。現代の若者たちの多くは、小さい頃からコンピューター・ゲームで遊んでいます。それらのゲーム・ソフトは、映像の天才と言われる人々が、何ヶ月も必死になって、命を削るようにして労苦しながら生み出したものです。そこにははっとさせられる臨場感に溢れたスリリングで魅惑的な映像が満ち満ちています。しかし、そういう映像を見慣れた現代人は、自分自身の想像力を駆使して、イメージを膨らます必要が無くなってしまいました。その分、かえって私たち自身のイマジネーションを思いめぐらす能力が枯渇してきているのではないのでしょうか。

私が自らの想像力の貧困さを痛感させられるのは、天空に瞬く星を見上げるときのことです。東京ではたくさんの星を見ることは難しくなっていました。尾瀬や上高地あたりに行けば、満天の星を振り仰ぐことができます。その星空に見いりながら、北斗七星が、ヒシャク型をしているとか、カシオペアがWの形をしているということくらいなら分かります。しかし、あそこにサソリがいる、こっちには白鳥がいる、あっちには弓を射る人がいるぞ、なんてことは、到底、思いめぐらすことができません。私は、何度振り仰いでみても、そこにはきらきら光る点としての星しか見えてこないのです。しかし、二千年前、三千年前に、砂漠を旅した人々は、夜空にサソリを、白鳥を、弓を射る人を見出すことができたのです。なんとという豊かなイマジネーションの力を持っていたことでしょう。

そのようなことを思いめぐらしてみると、現代の私たちには、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という心も次第に失われてきてしまっているのではないかと思えてならないのです。言い換えれば共感する心、響き合う心が失われつつあるということです。

たとえば、満員電車の中で、携帯メールを打ち続ける人、電車から降りるときに、一声「降りますよ」と声をかければ、通路を開けてもらえるのに、無言のまま無理矢理まわりの人を押しつけて降りようとする人、かと思えばドアの近くにいて降りてくる人に通路を開けようともしない人などが目に付きます。更に、もう珍しくなくなりましたが、電車のなかでお化粧する女性が増えてきました。マスカラを塗るくらいならまだしも、ビューラーで睫の形を整える人までいます。電車が急停車したら危ないのにとはらはらさせられます。それどころか私の前にすわった女子高生が、おもむろにかみそりを取り出し、腕のむだ毛を処理しはじめたのには、啞然、茫然とさせられたことです。車内が空いていた時間帯ではあってもまさに傍若無人、あたかも傍らに人がいないかのごとく振る舞う人が増えてきています。つまり、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」はるかに手前のところで、人間のありようが崩れてきてしまっているように思えてならないのです。

村上春樹さんの『海辺のカフカ』を読んでいたなら、ナチスの親衛隊中佐で、ユダヤ人大量虐

殺の中心人物となったアドルフ・アイヒマンのことが触れられていました。

彼は大変有能な実務家でした。ナチの幹部たちからユダヤ人の大量殺戮という課題を与えられ、プランをつくります。その行為が、倫理的に正しいことか、正しくないことかという問いを持たないまま、彼は、いかに短期間で、しかも費用をかけず、1100万人のユダヤ人を殺せるかということだけをひたすら思いめぐらし続けます。

計画は実行に移され、ほぼ彼の思惑通りの効果を発揮します。戦争が終わるまでに目標の半分の600万のユダヤ人が彼のプランに沿ったかたちで殺されました。しかし彼が罪を感じることはありません。エルサレムの法廷の防弾ガラス張りの被告席にあって、自分がどうしてこんな大がかりな裁判にかけられ、世界の注目を浴びることになったのか、アイヒマンは首をひねるのです。自分はひとりの技術者として、与えられた課題に対して最も適切な解答を提出しただけなのだ。世界中のすべての官僚がやっているのとまったく同じことをやっただけではないか、と。

このアイヒマンの姿は、何を私たちに突きつけるのでしょうか。確かに有能な職業人、官僚、研究者であることは極めて重要なことです。しかし、それよりも前に、私たちは、神の愛を受けながら「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」とされていく者、響き合う心を持つ者でなければならぬということではないでしょうか。

青山学院は、幼稚園から大学院に至るまでそのことを大切にしてきた学校です。だからこそ教育方針には、「青山学院の教育は、キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、神の前に真実に生き、真理を謙虚に追求し、愛と奉仕の精神をもって、すべての人と社会とに対する責任を進んで果たす人間の形成を目的とする」と謳われているのです。そのことを体得するための場が青山学院には備えられています。それは毎日、各部で持たれる礼拝です。皆さんが礼拝に加わることを通し、青山学院の心をしっかり受けとめ成長していかれることを切に祈り願っています。ご入学おめでとう。

大切にしたいこと

川島祥子

幼稚園主事



2008年度ご入園の皆様、おめでとうございます。春の穏やかな光を浴びて、お庭の花も動物たちもみなさんのことを待っています。保護者の皆様もこれからどのような幼稚園の生活が始まるのか楽しみであり、また緊張を覚えておられることでしょう。

さて、幼稚園で大切にしていることを少し書きたいと思います。それは、まず、異年齢の子どもたちが遊びを中心として一緒にここで育っていくのだということです。子どもたちが様々な友だちと出会い、自然の不思議さやおもしろさにも心と体を存分に働かせ、五感で感じる経験をたくさんしてほしいのです。幼児期にはこの感じるということがとても必要です。感じる世界が育って始めて、絵本をよんだとき、ことばによってイメージの世界が育っていくのです。こうして自分以外の世界に心の目が広がり他者と心通わせることができるのです。

幼児にとり三年間は本当に貴重なかけがえのないときです。神様はすべてときに適ってうつくしくして下さるのです。幼児期もそうです。大切にこの時期を経験しながら自分の考えをきちんとことばにしつつ、相手の思いもわかる人へと成長してほしいのです。

神様がどんなにか愛に満ちたお方であるか、そのことが感じられ、自分がどんなに弱くても愛し守ってくださる神様の恵みに子どもたちが感謝していかれるように、教職員一同、祈りをもって子どもたちに伝えていきたいと思います。

たくさんの出会いの中で

生沼晴美

幼稚園教諭



新入園児のみなさん、保護者のみなさん御入園おめでとうございます。年中組や年長組の子どもたちも先生たちも、新しい仲間がやって来るのを楽しみにしています。

幼稚園では、それぞれの子どもが、好きな場所で興味を持った遊びに取り組んでいます。園庭にはブランコや滑り台や砂場もありますし、身体を存分に使って遊びます。室内ではお人形、汽車のセット、積み木などを使って、様々なごっこ遊びが展開したり、空箱や包装紙などの廃材を使って思い思いに遊びに使うものを製作したりしています。そこでユニークな遊びや作品もたくさん生まれるのです。多様な遊具や素材との出会いを通して、子どもたちは遊びの中で様々な経験をしながら、ある時は一人でじっくりと、ある時は友だちと一緒に、楽しい、面白い発見をたくさんしていくに違いありません。

年少組のみなさんも、幼稚園が楽しくてたまらないと思うようになるでしょう。けれども初めての出会いには、嬉しいことばかりとも言えません。友だちと物の取り合いをしたりけんかをしたりすることもあるでしょうし、初めてのことでただ不安になるかもしれません。そんな時、目には見えないけれども、どんな時にもやさしく見守り、力づけて下さる神様が共にいて下さいます。子どもたちにとって神様の存在を知り、神様に出会うことが何より大きな力となります。神様のもので、安心して幼稚園生活を始めましょう。



新入生のみなさんへ

戸井田直人

初等部教諭



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんを初等部にお迎えできることを心から喜んでいきます。

これから、どんな初等部生活が待っているのか楽しみですね。すぐに新しいお友だちができるでしょうし、上級生のお兄さんやお姉さんたちが、いろいろと分からないことを教えてくれたり、一緒に遊んでくれたりするので、安心してくださいね。

初等部では毎日礼拝を守ります。そこでは神様を賛美する歌を歌ったり、お祈りしたり、聖書の御言葉を学んだりします。初等部で大切にしている聖書の御言葉に、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉があります。これは、イエス様が最も重要な掟だとおっしゃった「隣人を自分のように愛しなさい」に通じる教えですね。青山学院を支えてくださった、米山梅吉先生がたびたびお話になった御言葉でもあります。自分が誰かのお役に立てることを考えられるようになっていってほしいと願っています。

イエス様はおっしゃいました。「子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」みなさんが持っているその素直な心をいつまでも大切に、神様に頼りつつ初等部生活を楽しんでいきましょう。

しょうぶの生活

たち

しんのすけ

初等部3年



一年生のみなさん、ご入学おめでとうございます。しょうぶで、一番楽しみにしていることは何ですか。ほくは、はじめは、一人で電車にのって学校に行けるかなとか、友だちたくさんできるかなとか心ばいでした。でもすぐに友だちができて楽しくなりました。ほくは、よく図工しつにあそびに行っていて、いけだ先生から、ずっこけレンズやきれいな石、よくのびるねりけしをもらいに行ったり、ほけんしつのかとう先生とお話をしたりするのもすきです。

そのほかにもしょうぶは、たくさんのキャンプがあります。一年生は、なかよしキャンプ、二年生は、のうぎよ村の生活、三年生からは、雪の学校などです。なかよしキャンプでは、虫とりやキャンプファイヤーができるので楽しみにして下さい。

学校では、毎月、しのあんしょうがあります。何回読んでも同じところをまちがえたりする時もあるけど、ぜんぶおぼえてスラスラ言えた時はすっきりして、うれしい気持ちになります。一つも知らなかったかん字も、今では240文字おぼえました。

ほくたちは、しょうぶのお兄さん、お姉さんにやさしくしてもらっています。ほくもかみさまの教えをまもり、一年生のみなさんにやさしく、わからないことを教えてあげられる三年生になりたいと思います。いつでもあそびに来て下さい。



新入生の皆様へ

関 隆一

中等部教諭



新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。中等部へのご入学を、心よりお祝いいたします。

中学時代の3年間は、心身ともに大いに成長する時期かと思えます。大きく成長するためにも、常に目標を持ち、失敗を恐れずいろいろなことに挑戦して欲しいと思います。勉強では、テストだけでなく、漢検、英検などの資格を取得することもできますし、クラブ活動では、大会やコンクールなど活躍する機会がたくさんあります。初めはうまくいかないかもしれませんが、これから始まる中等部生活で、たくさんの友人や先生に出会い、きっとその出会いから、ともに悩み、ともに壁を乗り越え、大きく成長することができるのではないでしょうか。また、毎日の礼拝を通して神にふれ、心の成長に大きな力を与えて下さることでしよう。

求めなさい。そうすれば、与えられる。

探しなさい。そうすれば、見つかる。

門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

(マタイによる福音書7章7節)

この聖句のお導きがありますよう、青山学院中等部3年間の生活で大きく成長することを期待します。

入学にあたって

蛭原慎之介

中等部学友会会長



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは、まだ入学したばかりなので、右も左も分からないような状況だと思えます。なので皆さんに、この学校での生活について、少しご紹介してみたいと思います。

やはり、この学校の大きな特徴と言えば、毎日ある礼拝だと思います。外部から入ってきた人たちは、最初の頃は聖書の開き方でさえ戸惑うことがあるでしょう。しかし少し勇気を出して、近くの内部生に聞いてみてください。きっと優しく教えてくれるでしょう。

それと、皆さんはきっと友達ができるか少し不安に感じているかもしれません。しかし安心してください。中等部には入学してすぐにオリエンテーションキャンプというのがあります。きっとそこですぐに友達ができるはずです。もしここでできなくても焦る必要はありません。部活が始まれば、やさしい先輩たちもいるので必ず友達ができます。正直、クラスより部活の方が深いつなかりになると私は思います。

実際、中等部にはこの中には書ききれないほど楽しいことがまだまだあります。もし中等部生活で分からないことがあったら、気軽に先輩に話しかけてください。きっと優しく答えてくれると思います。

私たち上級生も、皆さんと楽しい中等部生活を送れることを楽しみにしています。



新しい出発

宇田川雅子

高等部教諭



ご入学おめでとうございます。
春は日本では新年度の始まり、わくわくする季節です。

でもこれを読んでいる人の中にはもしかしたら、通いなれた中学校の仲間や先生のことを忘れられず、新たな気持ちでスタートを切るのが難しいな、と感じている人がいるかもしれません。

私はかつてそういう生徒でした。新年度になるとまわりの人たちはどんどん新しい学校、新しいクラスに慣れていくのに自分はいつまでも楽しかった昔のことが忘れられず、自分だけが取り残されていくような寂しい思いをしていました。

でも心配する必要はありません。無理をして楽しかった時のことを忘れることも、必死になって新しい生活に慣れようとしなくてもよいのだと思います。なぜなら、神様は私たちが今は想像もできないような素晴らしい出会いを計画してくださっているからです。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

(ローマの信徒への手紙 8 章 28 節)

これからのみなさんの新しい生活の上に、神様のお恵みと祝福が豊かにありますように。

礼拝と私

浅賀未央

高等部2年



ご入学おめでとうございます。中等部から内部進学で来た人も、他の中学校から厳しい入学試験を突破して来た人も、新しい環境に期待と不安を感じているだろうと思います。

さしあたって直面するのは、人間関係についての不安でしょうか。

でも、心配することはありません。何事も時間が解決してくれます。慣れるが勝ちです。最初は孤独を感じても、そのうちなんとかなります。本当に。

さて、突然ですが、ここで私の好きな聖句をご紹介します。

「どう足を進めるかをよく計るなら

あなたの道は常に確かなものとなろう。

右にも左にも偏ってはならない。

悪から足を避けよ。」

(箴言 4 章 26、27 節)

最初はフラついて、さまざまな行事や毎日の授業、いつの間にかできている友達、それから青山学院最大の特徴である礼拝が支えとなり、しっかりした足取りを身につけることができる。積極的に楽しもうとすれば可能性は無限に広がるけれど、受身に適当に過ごしていると、単調でつまらない毎日の繰り返しになってしまう。すべては自分の意思ひとつで決まる。高等部は、そんなところですよ。

みなさんの3年間で、有意義で充実したものとなりますように。



入学にあたって

鈴木俊之

女子短期大学
子ども学科



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。入学した今の気持ちはいかがですか。ほとんどの人がこれまであまり信仰と関わりなく生きてこられたと思うので、なかには礼拝をはじめとしたキリスト教関係の行事に面食らった人もいないのでしょうか。かくいう僕も青山学院に来るまではキリスト教と関わりのない生活を送っていましたので、いろいろ驚くことが多かったのですが、良い経験ができたとも思っています。

皆さんにもそうした出会いを経験してほしいのですが、なかにはそんな面倒だよって思う人も、あるいは宗教に対してあまり良いイメージを持っていないので、関わりたくないよと思う人もいるでしょう。それはそれで一つの態度だと思えますし、無理に参加することはないと思います。

でも、と敢えていいます。僕たちはある意味非常に世俗的な世界に生きていますが、世界ではキリスト教をはじめとする様々な宗教の世界に生きている人が多数であり、そうした人たちと一好む好まざるに関わらず一共に生きていかざるをえないのが現代という時代です。だとしたらそういう人たちが何を信じ、どのように考えているのかを知らなければいけない時代だといえるでしょう。

今、青山学院女子短期大学にいるということは、キリスト教を知ることができる絶好のチャンスです。少しでも興味があれば、様々な行事に参加してみたいかがでしょうか。

新入生のみなさんへ

篠崎みなみ

女子短期大学
国文学科2年



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さん一人ひとりを新しい仲間として、歓迎致します。

これから始まるキャンパスライフを目の前にして、期待に胸を膨らませると同時に不安も抱えているかもしれません。授業をはじめ、サークルや部活動など様々なことに目を向け、関心を持ってください。おのずと自分のやりたいことが見えてくるはずですよ。

青山学院女子短期大学では、礼拝をはじめとしたキリスト教行事が多くあります。私は宗教活動委員会所属団体の一つであるハンドベル・クワイアで活動しています。チャペルコンサートや点火祭等、多くの場で演奏する機会があり、皆で一丸となって生み出すメロデーは素敵な音色を奏で、とても心地よく心に響きます。日々一緒に練習してきたからこそ分かち合える感動は、かけがえのない思い出となって残り、豊かな経験や知識だけではなく、学年を越えた友情も手に入れることが出来ました。

「時は金なり」という諺のように、人生で1度しかない今という時間を無駄にはしないでください。ただ過ごすのではなく、自分に今何が必要なのか、そのために何をすればいいのかを考えながら、日々を送って欲しいと思います。

皆さんにとってこの学生生活が、最高の時となりますように。



偉い人とは

矢部 義之

大学理工学部教授



人生で「入学おめでとう！」と言ってもらえるのはほんの数回しかないし、多くの大学新入生にとってはこれが最後の「入学おめでとう！」となることを考えると、やはりめでたいことであり、感謝すべきことです。

私は1964年に本学英米文学科を卒業後、英語教師となり、1980年より本学理工学部で教員の職を与えられた卒業生として、新入生の皆さんにも私が本学で与えられた真の教育を受けていただきたい。私は素晴らしい尊敬すべき恩師に恵まれました。20歳の時にクリスチャンとなって、その事がこれまでの人生の大切な決断の時に導いてくれたと感謝しています。

本学ではどうかキリスト教精神を学んでいただきたい。入学式でも聖書のメッセージを聴かれたことでしょうか。大学では毎日、チャペルアワーがあります。キリスト教関係の科目や行事もあります。他の大学では得られないキリスト教精神を学んでいただきたい。誰でも偉くなりたいと思いますが、聖書は本当に偉くなりたいければ「皆に仕える者、すべての人の僕（しもべ）となりなさい」と教えています。

また国際化が求められている時代ですから、英語のみならず色々な外国語も学び、これらの国々に留学して欲しい。大学は海外の50以上の大学と学生交換協定を結んでおり、本学国際交流センターは皆さんの海外留学をサポートしています。大きな夢を抱いて有意義な学生生活を過ごして下さい。おめでとう！

青山学院大学でしか出来ないこと

安藤 果菜

大学国際政治経済学部
国際政治学科 3年



新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。あなたは、この青山学院が第一志望校で、喜びに浸っているかもしれません。もしくは、あなたは、この大学が第一志望校ではないかもしれません。どちらの場合にも言えることは、この青山学院大学だから出来ることを探して欲しいということです。

私は青山学院が第一志望校ではありませんでした。第一志望校と第二志望校に落ち、失意の中で一般入試を目指そうとしたのですが、そのとき、青山学院のスクールモットーに目が留まりました。「地の塩、世の光」。心を惹かれて、全国キリスト者推薦を受ける決心をしました。

私が大学に入って「地の塩、世の光」の真意に気づいたのは、青山キリスト教学生会での活動の中でした。自分自身が地の塩や世の光なのではなく、実際に地の塩、世の光であったのは神でした。神の栄光を反映するものとして私たちが用いられる、ということを目指しているのだと学びました。青山キリスト教学生会では、青山学院の建学の精神に基づき、聖書の学びをしています。それは大学を卒業しても人生の道しるべとなるものだと思います。

私にとって、これが青山学院でしか出来ないことでした。あなたにとっての青山学院でしか出来ないことは何でしょうか。これからの学生生活の中で、それが見つかりますように。歩みを神様が導いてくださいますように、お祈り申し上げます。



ズボン、痛い^{しよ}と泣いている — 生命の大切さ —

福井 達雨

知能に重い障害を
持った人たちの家
止揚学園職員



私は近江にある施設、止揚学園^{しよ}で知能に障害を持つ人たちと五十六年間を共に歩んできました。

さて、この頃、地球温暖化、食品問題、戦争、テロ、貧困、犯罪等、他者の生命をおかす利己の個人主義が強くなってきています。その中で（神さまがくださった生命はどんな小さな生命でも、誰もおかすことのできない大切なものやのに）と考える日々です。

先日、止揚学園の見学に来た学生たちの中に、破れたズボンをはいた者が数人いました。それを見て、止揚学園に入園している人たちが

「ズボン、いたい、いたい泣いている」

と悲しそうに言いました。学生たちは不思議だったのか、私にその意味を尋ねましたので

「この人たちは（ズボンにも生命がある）と
思っていて、人間が自分の立場や勝手な行動でズボンを破れば“いたい”と泣くと考えているんや。その思いをきみたちに“ズボンの生命をおかさんといて”と訴えているんや」

と答えると、一人の学生が言いました。

「これは現代のファッションで、この若者の感覚がこの人たちには分からないのですね」

「そうかなあ。この人たちはズボンの立場に立って考えているんや。そやから、ズボンが“いたい”と泣いている声が聞こえるんや。それは深い感性を持っているからやろうなあ。しかし、きみは自分の立場からしか考えられなくて“ファッション”と言っているんや。この頃、僕たちは人間的な自分中心の感情や要求は強く持つようになったけど、相手の立場に立つ、優

しい心や感性が弱くなってきているように思うんやけど、他者の立場に立てる人間と自分中心に歩む人間と、どちらが本真^{ほんま}に優しい心を持っているんやろう。現代は自分を主張し、大切にする“人の時代”なんや。人と人が助け支え合い、他者を大切にする“人間の時代”やあらへん。この時代は助けを必要としない強者は生きられても、それを必要とする弱者は切り捨てられ、生命がおかされてしまうんや」

と語る私の言葉に、学生たちは納得できないようでした。そして、入園している人たちの深い生命観^{いのち}が理解できませんでした。私は（現代の人間は自分を大切にする正義を持っていても、相手を思いやる愛が欠ける時代や）と感じた時でした。

止揚学園に入園している人たちは（総てに生命がある）と考えていて、自分の、他者の生命を同じように大切にしています。だから、他者の生命の声が聞こえてくるのです。

生命の大切さを知らずに生きていると
隣人^{となりびと}の悲しみには気がつきません
そればかりか 恐ろしい事に
鏡の中の自分が見えません

これは昨年、亡くなった弟の詩です。癌^{やまい}という病の中で、生や死と対決し、生命に対するこんな優しい言葉が生まれてきたのだと思います。

（生命を大切にしない人間は、他者の心の声が聞こえなくなり、何とも思わず生命をおかしてしまいます。そして、自分を見失い、人間の存在をも否定し、生命の尊厳と畏敬を失ってしまう）と弟は考えていたようです。

「生命、神さまくれはった」これは止揚学園に入園している人たちがよく言う言葉です。この心が、この地球に、地球に住む総ての人間に育つことができたら、どんな小さな生命にも大きな愛を持つ社会が生まれてくるのです。その日を祈り、^ま待ち望んでいる私です。

シリーズ「地の塩、世の光」は、各界でご活躍のキリスト者の「証し」を連載するコーナーです。今回は、青山学院とも深いかわりをもってきた止揚学園の福井達雨氏にご寄稿頂きました。

『ルルド傷病者巡礼の世界』

寺戸淳子著 知泉書館 2006年

支倉壽子

大学国際政治経済学部教授

カトリック信者は機会をとらえて聖地に巡礼に出かける。

聖地とされる場所は昔から信者をひきつけてきたところもあるし、比較的最近になってヴァチカンのお墨付きをもらって聖地となったところもある。概ね、聖人が葬られている場所か、そこで何らかの奇蹟が起きたところである。言い伝えられている奇蹟は、キリストの母マリアに関わるものが多い。その一つにして最も世界に知られているのが、19世紀に南西フランスのルルドの羊飼いの少女が遭遇した聖母マリアの出現である。

この少女ベルナデッタに聖母が姿を現したとされる洞窟には、現在聖母像が置かれている。言い伝えによると、聖母はベルナデッタに地面を掘るように命じ、少女がその言葉に従ったところ、土から清水が湧き出た。今はその清水の湧き出る様がガラスを通して見られるようになっていて、そこから伸びる長い水道管の中を水が流れている。巡礼者は水道管についているたくさんの蛇口から水を受けることができる。またその水を溜めた沐浴場の設備もあって、希望者は修道女やヴォランティアに手助けされて脱衣し、水の中に短時間つかることができる。

ルルドの町は、洞窟のまわりの教会などの言わば巡礼用設備と、ホテルや飲食店、土産物屋、そして傷病者を受け入れる施設とによって成り立っている。

町で出会うのは、多数の観光客のほかに、世界中から来た巡礼団、傷病者、そして傷病者の世話をするヴォランティアである。傷病者の多くは車椅子や寝椅子にのせられて、ミサや聖体行列に参加する。

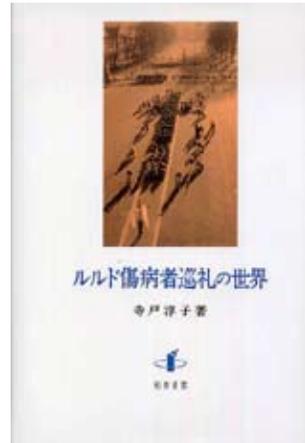
本書は、ルルドをルルドたらしめている傷病者とヴォランティアの関係に注目した長年にわたる研究の成果である（博士論文

に加筆）。

本来人目から隠されていた傷病者が、治癒をもとめてルルドにやってくる

ことによって白日のもとにその姿を見せるようになったこと、それら傷病者の世話に献身する信者たちの多様な組織（オスピタリテと名づけられる）がいくつも形成されたこと、オスピタリテの成員（オスピタリエ）は何よりもディスポニーブル（即座に要求に答えることができる）であることを求められることを著者は歴史的にたどる。膨大な資料にあたって、オスピタリテ（歓待という意味のフランス語）という組織のさまざまな様相を詳述し、フランス社会の中に置きなおしてみる著者は、傷病者の存在こそがルルドの要であると主張する。政教分離の原則成立以降のフランスにおいて、宗教は「私」の領域にあるとされるが、ルルド巡礼は「傷病者の存在を活用して『公的』であり続けようとしてきた宗教的活動」であると著者は結論する。

本書の中で私にもっとも強い印象を残したのは、オスピタリエは贖宥に与ることができるということ。すなわち、オスピタリエが傷病者に尽くしたことによって煉獄にいる死者の贖罪の刑期が短縮されるということである。得た功德が自分のためになるのではなく、すでに現世にいない誰かが恩寵に与るのに寄与する。結局、傷病者の存在が、善行の流通のきつかけとなり、死者をも含む共同体が作られることになる。このことこそ傷病者もオスピタリエもルルドを目指す理由ではないのか。



氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料紹介第22回(前回)は、1941年のDr. Diffendorfer報告書の紹介でしたが、日米戦争直前の日本の社会状況の観察までで終わっています。今回はその続編として当時の日本の主として教会事情についての報告の部分の解説を致します。

ディッフェンドルファー報告書は、キリスト教会の“合同問題”について多くのページを費やしています。これは彼が当時の日本の宗教事情について、国家方針としての全体主義的圧力をよく見極めていることを物語っているようです。文部省側での教派の“合同”或いは“合併”の圧力はかなり強く、既に仏教側では56教派が30に減らされるまでになっている、という現状を述べた上で、キリスト教会の“合同”のプロセスを詳細に報告しています。キリスト教側では“国家をあげての計画”の圧力の前に、当初ローマカトリック・ギリシャ正教・プロテスタント各教派が合同させられるかもしれない、と多くの人が思ったようですが、恐らく枢軸同盟国の影響でローマカトリックはまもなく合同から撤退、また理由は不明ながらギリシャ正教と英国国教会(聖公会)も“合同”の趨勢から退いた、という状況をのべた上で、プロテスタント各派の合同については日本キリスト教協議会総幹事の宮川氏とチャールズ・アイグルハート宣教師の論文(日本キリスト教四季報1941年1月号)に、その経過と問題点を十分に議論し盡している、とこれを紹介しています。日本のプロテスタント各派には最初から教会合同の唱導者がいたけれども、1941年時点での問題は少数の教派主義神学者に指導された狭量の教派主義者の存在である、とディッフェンドルファーは見えています。合同計画の中心は新合同教会の構成であって、各教派組織を代表する「部(ブロック)」によって構成され、これらは厳し

くその数を限定され、各教会の教派的名称を使わずに、第1部、第2部…等と呼ぶことによって、新合同教会を構成する会員に、“合同教会”を馴じませようとする目算である、と彼は見ていたようです。

ところで新合同教会にとって最大の難問は教義の問題で、例えば“処女降誕”“生ける者と死ねる者をさばく”“からだのよみがえり”等をどう教義論で扱うかは議論のあるところ、更に神(カミ)をどう云い表わすかの問題、即ち日本語の神は神社の神をさすが、キリスト教の理念としての“天の父なる神”との混同のおそれをどう処理乃至解決するか、という現実の問題に彼は注目しています。文部省の態度は教義を一般的表現として取扱い、教団議長の富田氏に対して、教会が自らの教義を定める自由を保証するが「新体制と矛盾することなきように」と嚴重注意を促した、とつけ加えています。富田氏はまとめ役として「国家の体制は文字通り全体主義である」と云い切っているとして、ディッフェンドルファーは教会が直面している状況を“台風”と評し、宗教団体法は1941年4月1日までに合同の登録を義務づけていること、教会の運営に影響を及ぼす外国人を制限すること、外国からの経済的援助を禁ずること、そして小役人や地方官吏による現実の敵意ある行動、それは局地的に見えるかも知れないが、実はもっと一般的な圧力が高所からかけられているのだ、ということなどを見透しています。

そして一般の信徒は“合同”に対してどう思っているか。彼は“合同教会”の計画(proposal)がどの程度一般の日本人クリスチャンの要求を代弁しているか、或いはプレッシャー(圧力・重荷)になっているかは興味ある問題である、と要点をつけています。また彼は、多くの日本人クリスチャンは、彼らが或る特定の教派に属しているのは偶然の結果に過ぎない、即ち

自分で教派を選んだのではなく、たまたま或るミッションにかかり合ったのであって、他の教義との比較をしたこともないし、教派をえらんだこともない。そういう機会は全く与えられなかったし、単純にそれぞれの教派で説く“真実”を教えられたのである、という日本のキリスト教信徒の特徴を實に見事に見抜いています。従って合同教会及び一般信徒の実情は、信仰の基本に忠実に、共通の方向に進んでいる、と見えています。そしてこの合同が良いかたちで「成立する」可能性は国家の統制体制がどの程度の速度で進むかによるだろう、というのが彼の意見です。また新しい合同教会で各派の宣教師達は十分に意味のある奉仕が出来るか、という問に対して、新教団の指導者達は、それは全く可能である、とした上で、あらゆる感謝と希望の言葉が各教派の指導者及び信徒から公式＝非公式、団体＝個人によって我々（アメリカの宣教師）に寄せられている、と述べています。このような代表的信徒達の態度について、ディッフエンドルフアーは各教派の信徒達との会話の結果、日本のキリスト教会およびその組織の将来に十分大きな希望がもてると言っています。また彼は文部省の要請に従って外国からの援助が跡絶えた場合の新合同教団の資産状況にもふれ、現在ミッションの援助下にある教会や学校は1941年4月1日を期して外国の資金援助途絶の政策が発動されるとして、実に細かくその将来の財政計画にふれています。

ディッフエンドルフアー報告書は、最後に日米関係の悪化について憂いを述べ、宣教師達の去就について論じています。極東から欧米の影響を一掃する決意が日本でますます大きくなっているとして、政府高官によるアメリカ批判、可能性の出来事に対する危険な雰囲気が増大、政府系新聞の敵意をあげ、危機が迫っているという大衆一般の気持が切実になっているとして、1941年の1月後半には若干の日本人キリスト教指導者、教育者が明らかに豹変していること、状況が危機的になるにつれて日本人の普段の礼

儀や「ひかえめ」の態度がなくなっていること、信頼する日本人の友人が、宣教師に今はもう帰国の時だと警告したことをあげて、“まさか”の場合、宣教師の帰国は既におそい、敵意を煽ることはもう始まっていて、ゲシュタポの手段が既に明らかである、と警戒を表明しています。然しこれは多くの宣教師にとって“神が私をこの場所に派遣した”という信念をめぐっての心中の戦いの問題である、とも云っています。従ってグルー大使の忠告によって直ちに帰国するのは女性と子供それに病者に限られるだろう、と見透しています。

ディッフエンドルフアーはこの危機的状況の中でなお日本のキリスト教の将来に希望をもって、日本の信頼するプロテスタントの信者の間では依然として自由主義的な会話が話されていることを挙げ、日本の教会では善意の代表団をアメリカに送りたい希望がある（筆者注・これはこの年阿部義宗を団長とする反戦使節のアメリカ訪問によって実現した）として、“何が起ろうとも”他の国のキリスト者との友情と善意を保ちたいという大きな証拠を私は見ている、と断言しています。

そしてこの増大する危機感の前で、アメリカのクリスチャンは何が出来るだろうか、と自問し、日本を理解するために可能なことは何でもやるべきである、として移民排斥法の撤回を求め、太平洋の平和のために喜んで何をなすべきか、政府を説得することを提案しています。

最後に彼は日本のキリスト教運動には、余りにも多くの西欧的要素があった、然し他のすべてのことと同じように同化の原則が進行し、本当に固有土着の日本的キリスト教が今や芽生えて来ている、キリスト教の日本化は他の国にも影響するだろう、と述べてこの報告書を終えています。そして前回に書いたように、このあと“訪問の成果”という彼の評価があるのですが、そのページは失なわれているので、彼の本心がわからないのが残念です。

日本基督教団相模原教会

齋藤久恵

宗教センター相模原分室

相模原市は米軍基地の多いところですが、相模原教会も米軍基地の中の聖書研究会から発展した教会で、今年創立 60 周年を迎えます。場所は JR 横浜線の淵野辺駅と矢部駅間の線路沿いにあり、相模原キャンパスから歩いて 20 分くらいです。

この教会は本学と同じメソジストの流れを汲んでいます。説教者台と司式者台があり、前には恵みの座と呼ばれているものがあります。礼拝は日曜日午前 10 時 30 分の鐘の音とパイプオルガンの前奏から始まります。出席者は平均すると 140 名くらいでしょうか。辻川篤牧師はわかりやすく、ユーモアを交えてお話してくださいます。そしていつも教えられるのは、聖書の御言葉を何度も何度も読むと、見えてくること、わかってくることにあるということです。礼拝後はコーヒータイムがあり、親睦の時を持ちます。この教会のよいところは、気さくな方が多く、年齢に関係なくとてもなごやかです。コーヒーは前任の伊藤忠彦牧師が大好きでしたので、その伝統が続いていて、パーコレーターもサイフォンもあり、差し入れでお菓子もあります。皆さんこの時間をとても楽しく過しています。



さて、ここで青年会のことについてお知らせしましょう。青年会は大学生と独身の社会人がメンバーになっていて、本学の学生、卒業生も数名います。毎月 2 回、礼拝後に定例会があり、青年会独自で礼拝をしています。聖書を学んだり、『主の祈り』という本を読んだりしています。近年、韓国セムナン教会の賛美隊、延世大学音楽専攻の学生の方々との交流を持っています。昨年の 12 月にはその方々を訪問し、とても有意義な時を持ちました。主の祈りが韓国の方々、世界の人々を覚えて共に祈る祈りであることを知る事ができたそうです。

それから、これはとてもユニークなことですが、渋谷の聖ヶ丘教会と年に 1 回ソフトボールの試合をします。私が学生の頃にはすでにありましたので、30 年以上にはなるでしょう。もう一つ、カトリック相模原教会との祈祷会がやはり年に 1 回あります。記憶に間違いがなければ、本誌の 93 号で紹介されたカトリック戸塚教会のパーク神父が相模原におられた時に始まったように思います。

続けることは簡単なようで、難しいことです。私のような怠け者がよくぞ 30 年近くも教会生活が続けられたと思います。神様が、見離さず、この居心地の良い教会を与えてくださったことに感謝しています。

宗 教 セ ン タ ー だ よ り

幼稚園 より

始業礼拝

4月8日(火)

進級した年中児(4歳児)年長児(5歳児)が新年度スタートします。大きくなった喜びを胸に登園してきます。

入園式

4月11日(金)

新年少児(3歳児)40名をお迎えします。

イースター礼拝

4月17日(木)

年中児・年長児と一緒に礼拝を守り、その後園庭で卵探しをします。

ファミリーデー

6月7日(土)

おうちの方と一緒に礼拝を守った後、それぞれ年齢ごとに分かれ、楽しい時を過ごします。

子どもフェスタ

7月5日(土)

保護者会主催で行われます。収益金はCCWAなどに寄付しています。

終業礼拝

7月11日(金)

始業礼拝

9月2日(火)

年長組キャンプ

9月3日(水)～5日(金)

軽井沢の追分寮で、子どもたちが保育者と一緒に3日間過ごします。

(教諭 多々内三恵子)

初等部 より

2008年度新しい1年生を迎え、それぞれに進級しうれしそうな顔が初等部にそろいました。毎日の礼拝を中心に学校生活が始まります。

児童と教職員のための祈禱会

初等部では毎週祈禱会をもって祈りをあわせています。3～6年生(高学年)は火曜日、1～2年生(低学年)は金曜日の朝、8時から8時15分まで米山記念礼拝堂で行っています。聖書の輪読ののち、小さなグループに分かれて一人一人お祈りをします。昨年度の参加者の平均人数は高学年が100名、低学年は200名ほどです。

イースター礼拝

4月10日(木)

2008年のイースターは教会暦では3月23日でしたが、キリスト教信仰の中心に位置する礼拝ですから、新年度に入ってイースター礼拝を行います。

お母さんへの感謝の集い

5月14日(水)

「母の日」を覚えて礼拝を守ります。場所は青学講堂。
(宗教主任 小澤淳一)

中等部 より

春のCF(クリスチャン・フェローシップ)ワーク

日 時：4月7日(月)

10:00～11:30

内 容：校内清掃など

入学式

日 時：4月8日(火) 9:30

春の教職員修養会

日 時：4月8日(火) 14:00～15:30

講 師：藤掛 明(聖学院大学准教授、臨床心理士)

講演題：「問題行動に走る若者の心理」

イースター礼拝

日 時：4月25日(金) 10:05～10:40

説 教：渡邊 義彦(麻布南部教会牧師)

母の日・家族への感謝の日礼拝

日 時：5月8日(木) 10:20～12:00

教会暦

最近、「グローバルスタンダード」という言葉を頻りに耳にするようになりました。この言葉は「世界中どこでも適用される基準や規格」を意味します。興味深いことに、日曜日を休日とする「七曜制」は、明治維新後間もない1876(明治9)年に採用されたのでした。これによって日本は精神的にも鎖国から開国へと移行し、国際社会の一員に加わったと言えるのではないのでしょうか。同じ暦を持つということは、共同体を形成する上でとても重要なことです。

青山学院の建学の精神はキリスト教です。このキリスト教にも「教会暦」という暦があります。入学して初めてキリスト教に接する人も、クリスマスやイースターという言葉は聞いたことがあるでしょう。

教会暦はイエス・キリストの誕生を待ち望む「待降節(アドヴェント)」から始まります。神の子イエスの誕生を、厳かな思いをもって待ち望む四週間を指し、悔い改めという意味からも、礼拝堂にある聖壇のオルタークロスは、紫色のものが使われます。そして礼拝堂の前で配られる週報も、紫色の印刷になります。その後、「降誕節」、「顕現節」、「受難節」、「受難日」、「復活節」、「聖霊降臨節」、「神の国節」と続きます。全世界の教会やキリスト教学校などで、主イエスの誕生や復活を共に喜び礼拝が守られます。

現在は「復活節(イースター)」であり、主イエスが死者の中から甦(よみがえ)られたことを喜び、その栄光をほめたたえるという意味から、白のオルタークロスが聖壇に掛けられています。礼拝に出席された時、注意してご覧ください。(高砂)

宗教センターだより

奨励：棚村 恵子(元青山学院女子短期大学講師、
聖ヶ丘教会伝道師)

礼拝の後、生徒による楽器演奏や作文朗読、カーネーションの贈呈が行われます。

保護者聖書の会

日時：毎月第4水曜日 10:50～12:00
(宗教主任 西田恵一郎)

高等部 より

入学式、始業式

高等部は4月7日(月)に入学式を行い、新入生を迎えます。

8日(火)に新入生オリエンテーション、9日(水)全学始業式、またオリエンテーションが行われます。10日(木)は全学年英語テスト、生徒会による新入生歓迎会が行われ、11日(金)から授業が開始されます。

イースター礼拝

今年のイースターは3月23日の日曜日です。高等部では春休み中ですので、大分後になりますが、4月10日(木)にキリストの復活を祝って特別礼拝を行います。説教は梅津裕美氏(本多記念教会牧師)です。

保護者聖書の集い

今年度も保護者の方々のための「保護者聖書の集い」を毎月一度持ちます。聖書に初めて触れる人たちの会ですので、保護者であれば誰でも参加できます。具体的な日時は「高等部便り」でお知らせ致します。青山学院教育方針の基本にある聖書を学び、心の糧としていただきたいと思います。

(宗教主任 坂上三男)

女子短大 より

同盟校推薦入学生歓迎会

4月3日(木) 11:00 短大礼拝堂

始業礼拝

4月4日(金) 10:00 青山学院講堂

春の研修・親睦会

4月19日(土)

チャペル・ウィーク

5月19日(月)～23日(金)

サマー・キャンプ イン 軽井沢

8月1日(金)～3日(日) 短大中軽井沢寮

*春には「再生」とか「復活」という言葉がよく似合う。

木々の芽を見るだけで楽しい。イースターのシーズンだけのことはある。

(宗教活動委員 西願広望)

大学 より

キリスト教推薦入学生オリエンテーション

4月4日(金) 9:00～

ガウチャー記念礼拝堂他

キリスト教概論Ⅰオリエンテーション

4月5日(土)～4月9日(水)

ウエスレーチャペル

新入生歓迎礼拝

相模原 4月11日(金)～17日(木)

第二部 4月15日(火)

チャペル・ウィーク

5月19日(月)～24日(土)

バッハ・コレギウム・ジャパンコンサート

5月29日(木) ガウチャー記念礼拝堂



宗教センター・グループ活動について

いずれの集也会も自由に参加することができます。

○「青山学院大学聖書研究会」(宗教主任担当)

わかりやすく、楽しく聖書が学べます

○「フォーカス・グループ」(キリスト者教員担当)

文学、自然科学、社会問題、音楽などとキリスト教信仰とのかかわりにおいて語り合い、考え合います。詳しくは「キリスト教活動のしおり」、「Kairos」をご覧ください。

(宗教センター事務室 平野修一)

本部 より

教職員新学年度礼拝

4月7日(月) 17:00～

ガウチャー記念礼拝堂

説教 大島 力 大学宗教部長

(宗教センター事務室 平野修一)

編集後記 先日、久し振りに『炎のランナー』(1981年度アカデミー賞4部門受賞)をDVDで観ました。映画の舞台は1924年のパリ・オリンピックです。ユダヤ人に対する偏見と闘うために走る青年と、神の栄光のために走る青年の二人が主人公です。特に後者の青年は宣教師であり、自分の出場種目が安息日である日曜日に行なわれることになり、深く悩みます。彼は祈りの中で決断し、平日に行なわれる他の種目に出場します。そして見事に栄冠を勝ち取るのでした。この礼拝を大切に守ろうとする真摯な姿勢は、世界中の人々に大きな感銘を与えました。

青山学院の建学の精神は、このキリスト教に基づいています。新しい年度も礼拝を大切に守りましょう。(高砂)

Wesley Hall News 第96号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 嶋田順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)
URL:<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail:agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウエスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社